ゼロから学ぶ 障害のある子ども・若者のセクシュアリティ

日本福祉大学
伊藤修毅

いとう　なおき／日本福祉大学准教授。専門は障害児・者のセクシュアリティ教育、青年期教育。共著に『イラスト版発達に遅れのある子どもと学ぶ性のはなし―子どもとマスターする性のしくみ・いのちの大切さ』（合同出版）、『くらしの手帳』（全障研出版部）など。

第6回　距離感ではなくふれあいを

「知的障害や発達障害の人は、どうしても人と人との『距離感』がわからないようですが、どうすればよいでしょうか？」という質問をしばしば受けます。今回は、この問いを考えてみます。昨年度の『みんなのねがい』の別府哲さんの連載の最終回[1]は、「腕一本、離れなさい」という小見出しで始まりました。あえて、同じ小見出しで書き始めます。

腕一本、離れなさい

おそらく、さきほどの質問を受けたどこかの「専門家」が、「発達障害の人には具体的に伝えてあげることが大切だよ。だから、距離感がわからないなら、『腕一本、離れなさい』とか、『1m離れなさい』とか、具体的に伝えてあげることが大切だよ！」と回答したということがあったのではないかと推測しています。その結果、この「腕一本、離れなさい」などの機械的に距離感を叩き込む指導は、驚くほど、全国の特別支援教育現場に蔓延しています。

ある特別支援学校が、県教委の研究指定を受けてとりくんだ「性に関する指導・支援」の実践研究をまとめた本があります[2]。この本では、「相手がだれでも、腕1本分の『あいだ』（距離）をとることが大事です！」とし、身近な人であっても腕1本分の「あいだ」を超えることを禁止しています。こういった指導が、妥当であるかのように流布されている現状に、強い危惧をもっています。

しばしば登場している1999年の「性の権利宣言」には、「セクシュアリティが充分に発達するためには、触れ合うことへの欲求が満たされる必要がある」とあります。つまり、触れ合うことへの欲求を満たさずに、機械的に距離をとらせる指導は、セクシュアリティの発達を阻害する、極めて危険な指導であるということを認識する必要があります。

異性とは腕一本!?

さきほどの「相手がだれでも」は極端と思われる方でも、「異性とは腕一本離れなさい」はやむを得ないと思われる方もいるのではないでしょうか。すでに性別二元論や異性愛主義が問題であることはお伝えしましたが、こういった根強い価値観と重なり、「異性とは腕一本離れなさい」は本当によく聞きます。

学校で「異性とは腕一本離れなさい」を教え込まれ、「こだわり」になってしまった自閉症の青年がいました。この青年は、通勤電車に乗れず、せっかく決まった就労先に通えず、就労を断念せざるを得なくなったそうです。「異性が腕一本以内に入ってはいけない」というこだわりを植え付けられた自閉症の方は、社会生活上の困難も強いられるのです。

このように育てられた青年が異性愛者なら、好きな人ができたときに、どれだけ苦しい思いをするかは想像にかたくありません。別府さんの文章でも紹介されていますが、当事者の悩みやねがいをベースに脚本を作っている岐阜の劇団ドキドキわくわくの「こえるよ　いまを！」という作品では、「腕一本」と指導されてきた青年の苦悩がていねいに描かれています。

遅れてくる愛着形成期

自閉症児は、いわゆる愛着形成期の時期が定型発達の方より大幅に遅れることがあり、思春期とほぼ同じタイミングでやってくることもしばしばです。小学校高学年や中学生くらいになり、今まで、ほとんど人に関心を寄せなかった自閉症児が急に人にベタベタとふれあいを求めるようになるという例は、この年代の子を支援している方であれば、ほとんどの方が経験しているのではないでしょうか。

この点に関連して重要な部分を、別府さんの文章から引用します。「心の支えとなる人とは、心理学でアタッチメント（attachment）対象と呼ばれるものです。心の支えとなる人の形成は、障害をもたない子においては、生後10ヵ月から1歳ころに可能になります。心の支えとなる人が形成されると子どもは、不安や不快な時にそこから逃げるのでなく、不安に立ち向かう姿を見せるようになります」「自閉スペクトラム症児が、知的には9歳すぎの力がありつつ、人との関係性では、障害のない子どもが10ヵ月から1歳くらいに形成するもの（心の支えとなる人の形成）をその時期に初めて獲得する可能性を示しています」「自閉スペクトラム症児が思春期に突然スキンシップを求める理由の一つ」「そのため、身体的なふれあいは、関わる側が認めることのできる形でどんどん行ってほしい」「授業でも、ふれあいの文化であるフォークダンスを意図的に組み込み、いろん